うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンビラ
第4号

発　行：うるくの歴史と文化を語る会
発行人：新垣敏雄　編集人：當間一郎
〒901-0153
那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
TEL.(098)857-1175　FAX.(098)852-1486

小禄間切の形成・発展とその社会

小　渡　清　孝

今日県都那覇市を構成する南部に位置する小禄地域は、農村社会の形態を変貌させ、郊外型都市化ともいうべき変容が加速的に進行している。しかし立ち入って観察するとなに気ない日常普段の生活の中に、年中祭祀や儀礼の中にまた地理的空間的景観の中などに、なお間切社会頃からの残影とその息づかいを感じることができるだろう。

うるく（小禄）と総称される地域は、いつの頃からどのようにして人々が集居し、社会を形づくり、琉球国を支える下部社会として整備、制度化されてきたか。この問いに答えるに適切な知識も能力も持ち合わせてない私だが、小禄地域に居住し、愛着を覚える一住民の立場で私なりに学んできたことを概略述べることとしたい。

小禄地域は琉球石灰岩台地に形成され、那覇港を挟んで北に那覇、漫湖に臨んで北東側に真和志、そして南東側は豊見城と境を接する。内陸部は農業に適する土地があり、西側は海に臨み、具志、大嶺、鏡水、垣花は海辺に接して集落を構え、大嶺、垣花などは漁業も兼業する農漁村社会であった。

王都首里と那覇、とくに那覇港に臨む地理的位置は、島尻方（ほう）東海道の宿道（公事道（くうじみち））の要衝の地にあり、そのことはすでに古琉球期にあって東海道ルート確立以前に軍事的性格をも併せ持つ“国道”開設のルートに現れている。すなわち古琉球期の尚真王代に守礼門前辺りを基点とする真珠道が開通した。（1522年）現在残っている金城の石畳道を下って金城橋を渡り、識名坂を上って上間から真玉橋に至り、橋を架け、石火矢橋を渡って豊見城城下を漫湖沿いに小禄に入り、小禄御嶽背後の今の後道（くしみち）を通って今の山下、トゥムイセーラの裾の道沿いに垣花小学校を突っきって那覇港南岸の垣花の地に至る。そこに海上防備の砲台である屋良座森グスクを築き（1553年）、花垣はいざという危急時の軍勢集結地としての位置づけ（「真珠湊碑文」）であった。そして北側の三重城（みーぐしく）砲台と相対した。

また真珠道沿いの漫湖に臨む台地には約三万年前とされる山下町第一洞穴遺跡と山下洞人の人類化石も判明している。そのすぐ近くには落平（うてぃんだ）の湧水の桶川が滝のように海面に落下する自然環境に古い集落が形成された。

「ウルク」の名は古琉球期中頃から人物名として役職に冠して登場する。初見は烏魯古結制（うるくうっち）の名で琉球国国相懐機の代理として暹羅（シャム）国へ派遣されている。（1438年）宜野湾市嘉数にある小禄墓の石棺銘の「おろく大やくくもい」（1494年）、「おもろさうし」の「おろくよこたけ」の地名に比定される呼称などがある。しかし小禄地域が間切として成立したのは遅かった。

間切制度の確立年代は明確ではないが尚真王代にはスタートしていたとされる。間切と村（シマ）制度は琉球全域で1908年（明治41）まで続いた独特の行政単位であった。小禄間切は1673年、真和志間切から小禄、儀間、金城の三村、豊見城間切から具志、大嶺、赤嶺、安次嶺、当間、宇栄原、高良、翠宮城の八村（「琉陽」では八邑のみ記述、翠宮城は推定）を割いて新設された。後ちに1700年代末頃の間切集成図の時点では松川、瀬城、堀川、田原の四村を加え十五村を描いている。近世、近代期に分離、新設、合併を繰り返して沖縄県土地整理事業が完了した1903年には、儀間村を那覇区へ編入、鏡水村を新設し、小禄、瀬城、安次嶺、当間、大嶺、高宮城、具志、宇栄原の九村へ統合した。その後もさらに分離統合を行って今日に至っている。

摂政羽地朝秀が登場した十七世紀中期以降新設間切が相い次いだ。その主たる背景には農業生産と年貢対策強化と連動して、王子や総地頭クラスの領地、脇地頭らの領地確保・配分の必要があり、村々の再編成もそのことと関係していた。

成立した小禄間切は、物奉行、田地方の支配下で間切番所（現那覇獣医科病院）を行政センターとして備え、地頭代以下役職と役人を配置して村と農民を統治した。首里王府の統治支配の論理は生産の強化、管理と貢納対策であった。もう一方の統治形態は、祭祀を通して行われた。王府任命の祝女と祝女殿内を中心に年中祭祀の儀礼によって整

然とも呼ぶべき規定は琉球王国由来記に克明に記されている。村々の御嶽と殿（トゥン）で展開される今日の祭祀に色濃く受け継がれている。

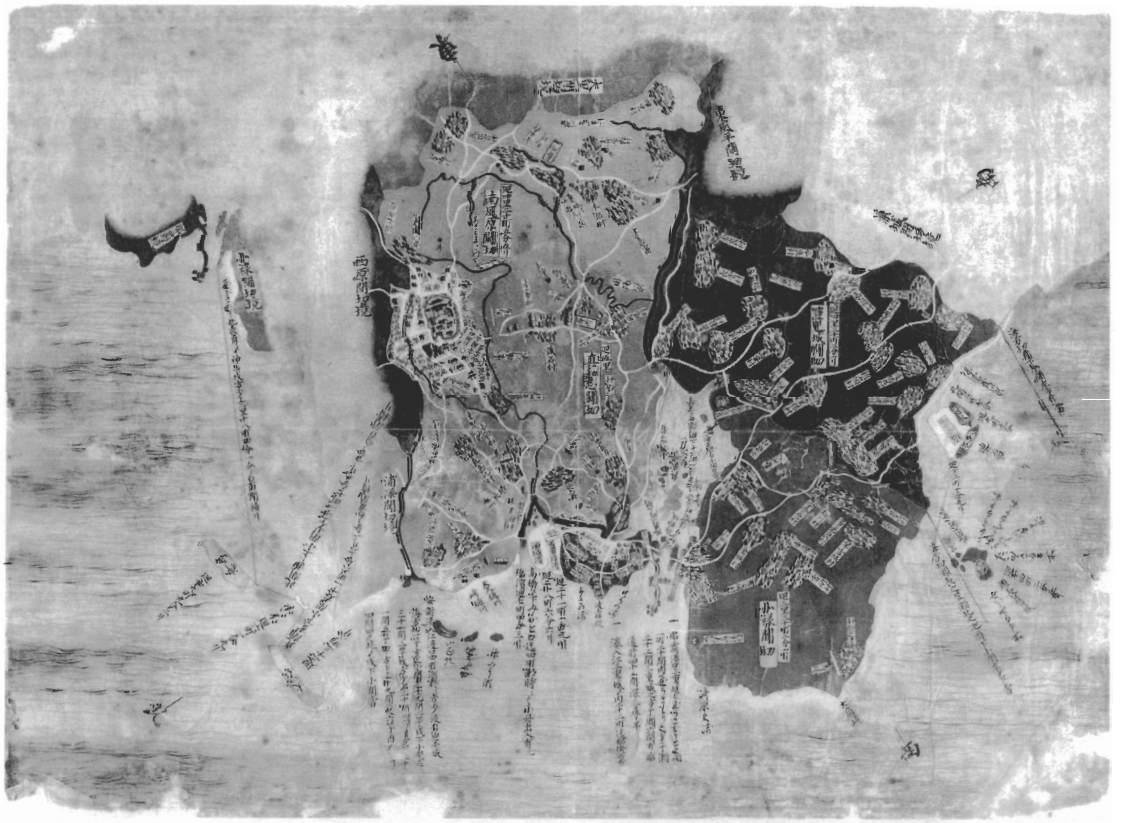
産業では小禄地域の風土に根づいた独特の生産物で世に知られた。「ウルクウァーサー」（養豚・屠殺肉業）は近代の那覇でその名をとどろかせ、小禄紺地（うるくくんじー）、琉球絣は「小禄・豊見城・垣花三村（みむら）」と村名連称で村の娘たちが一緒に機織の労働をする姿が広く謡われた。鏡水大根（かがんじでぇーくに）も特産品で知られた。これらの著名な生産物と労働意欲は近代に入って際立ったのだろうが遠く近世期までさかのぼると琉球の産業の恩人と称される儀間親方真常がその領地である儀間村（垣花）を拠点として新しい産業技術と生産物を開発し、定着させ、琉球全体へ普及した活動と風土的に気脈を通じる流れがあるだろう。甘藷の普及による食糧安定の飛躍的発展、木綿種子栽培と琉球絣生産、中国からの製糖法技術の導入と琉球糖業の基礎確立などの歴史的事実と経過がこの地で展開された。

しかし小さな島国の琉球では、増大する士族人口と共に薩摩や首里王府を支える生産力には限界があり、農村の疲弊は進行した。小禄間切内法や各村内法を見ると禁止・罰則のら列だが農作業などの手とり足とりの管理と労働意欲の促進に腐心する様子がうかがえる。祭祀に熱心で労働は手抜き、一方で身売り、滞納の家内（ちねー）倒れ、はては“御手入れ”といって村倒れ、間切倒れの復興対策も各地で発生し王府財政を逼迫させた。相い次ぐ異国船の寄港に対応する物入りも農村からの徴発としておし寄せた。小禄の人民も貧苦の中にあった。

人々はそのような時代にあっても心のよりどころを祭祀を通して求め、村踊り、組踊り、綱引き行事などを行い継承してきた。特筆されるのは袋中上人が持たらした浄土宗で、小禄浄土（うるくじゅーる）である。儀間真常も帰依したと伝えられ、念仏者を村で選抜した。照屋家に伝わる小禄浄土の鉦は首里王府最後の尚泰王の葬礼に首里まで上がったという。小禄間切の各所に今なお他地域に較べて梵字碑（石）が残っている。

小禄地域は沖縄戦と戦後の米軍占領支配によって多くの村落形態が一変した。村ごと接収された大嶺、鏡水、当間、儀間（垣花、住吉）をはじめ、大半が自衛隊基地に引き継がれた安次嶺などかつての村のかなりが部分的に基地にとられたままである。小禄、宇栄原、高良、宮城、具志（返還後）が旧村落の範囲を保っているがその中でも古層の村の形態、景観をようやくとどめているのは現在の字小禄ではないだろうか。

私たちが21世紀の初頭にあって生を受け育ち、生活する小禄地域の近未来を展望しつつ、次世代になにを語り、なにを残し継承するか、何げない風景の中に埋もれている足元の先人たちの足跡をきちんとみつめ、記録する作業が先ずは大事ではないでしょうか。



十八世紀末頃には成立していた間切集成図

琉球国惣絵図（間切集成図）　南風原間切、豊見城間切、真和志間切、小禄間切、（那覇、首里）　NPO法人琉米歴史研究会 所蔵

宇栄原大綱引き90年ぶりに復活

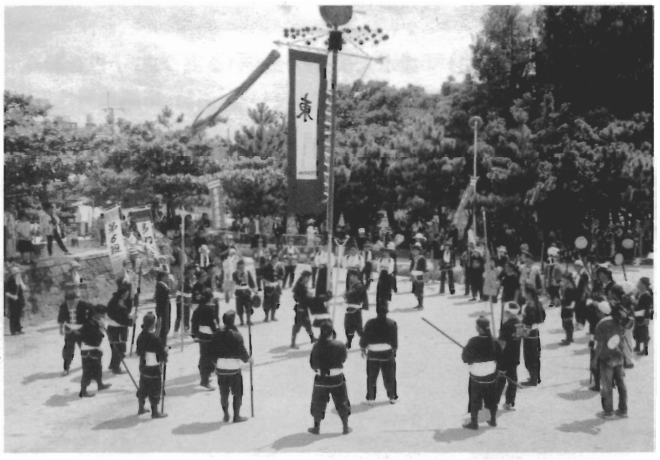
赤嶺和雄

宇栄原自治会（赤嶺和雄会長）は去年7月27日に90年ぶりに大綱引きを復活し、御嶽の在る高前原公園で熱戦を繰り広げた。宇栄原の綱引きの特徴はミチスネーイ（行列）で、あがり（東）いり（西）の各あしびなーに集まり、綱引き前に景気付けをする。空手演武、巻棒、そうして旗頭が舞う、それに女性達が踊るガーエー「シーヤァシー、シーシーシー」の掛け声は次第に高まり、喜びと興奮で顔が輝きだす。あしびなーを出発するミチスネーイの先頭は袴姿の長老、その次に老人会、鉦子（ショウグ）、ドラ鉦、ボラ吹き、太鼓打ち、小旗、子供達、婦人会、自治会とつづく、神道を通り綱引き場へ入る。綱は雌雄それぞれ28メートル。東西に分かれた500余名は審伴長が振り下ろした旗を合図に一斉に綱を引き合い、鉦やボラ、爆竹が鳴り響き、盛り上がりは最高潮にたっした。５分間の熱戦の末、西側が勝利した。

正装でミチスネーイの先頭に立つ長老

ムムヌチハンターと鉦子、ドラ鉦、太鼓隊

東支度・組踊「雪払」の伊祖之王子



旗頭持ち二才達のあがり（東）旗頭の舞い

旗を合図に一斉に綱を引き合う

女性たちが踊るガーエー「シーヤァシ…」

写真でつづる《うるくの貌》

鏡水大根　小禄は勿論のこと、沖縄を代表する産物（戦前、天皇陛下へ献上されたことがある）
小禄間切口説の中で「大根豊作す鏡水や日々の励みん、絶ゆみなく行く末広く頼もしや」と謳われている。

東町市場（戦前）　鏡水大根を売っているようす。子供をおぶって品定めしている女性や、立ち話をしている人々の様子がうかがえる。右上に腕組みをした男性の姿が写っている。当時、市場に男性の姿を見かけることは、大変珍しいことであった。

鏡水大根を盛ったバーキを頭上に乗せ、さらに手にも大きな大根を持つ女性、東町市場（戦前）の風景